

鑑定

泉鏡太郎

青空文庫

牛屋の手間取、牛切りの若いもの、一婦を娶る、と云ふのがはじまり。漸と女房にありついたは見つけものであるが、其の婦(奇醜)とある。たゞ醜いのさへ、奇醜は弱つた、何も醜を奇がるに當らぬ。

本文に謂つて曰く、蓬髮歴齒睨鼻深目、お互に熟字でだけお知己の、沈魚落雁閉月羞花の裏を行つて、これぢや縮毛の亂杭齒、鼻ひしやげの、どんぐり目で、面瘡が一面、いや、其の色の黒い事、ばかりで無い。肩が頸より高く聳えて、俗に引傾りと云ふ代物、青ン膨れの腹大なる瓜の如しで、一尺餘りの棚ツ尻、剩へ跛は奈何。

これが又大のおめかしと来て、當世風の廂髮、白粉をべたく塗る。見るもの、莫不辟易。豈それ辟易せざらんと欲するも得んや。

而して、而してである。件の牛切朝から閉籠つて、友達づきあひも碌にせぬ。一日、茫と成つて、田圃の川で水を呑んで居る處を、見懸けた村の若いものが、ドンと一ツ肩をくらはすと、挫げたやうにのめらうとする。慌てて、頸首を引搦んで、

「生きてるか、い、」

「へゝゝ。」

「確乎しろ。」

「へゝゝ、おめでたう、へゝゝへゝ。」

「可い加減にしねえな。おい、串戯ぢやねえ。お前の前だがね、悪女の深情つてのを超越して居るから、鬼に喰はれやしねえかつて、皆友達が案じて居るんだ。お前の前だがね、おい、よく辛抱して居るぢやねえか。」

「へゝゝ。」

「あれ、矢張り恐悦して居ら、何うかしてるんぢやねえかい。」

「私も、はあ、何うかして居るでなからうかと思ふだよ。聞いてくんろさ。女房がと

云ふと、あの容色だ。まあ、へい、何たら因縁で一所に成つたづら、と斷念めて、

目を押暝つた祝言と思へ。」

「うむ、思ふよ。友だちが察して居るよ。」

「處がだあ、へゝゝ、其の晩からお前、燈を暗くすると、ふつと婦の身體へ月明がさしたやうに成つて、第一な、色が眞白く成るのに、目が覺るだ。」

於稀帷中微燈閃鑠之際則殊見麗人である。

「蛾眉巧笑※ 頰多姿、纖腰一握肌理細膩。」

と一息に言つて、ニヤ〜。

「おまけにお前、小屋一杯、蘭麝の香が芬とする。其の美しい事と云つたら、不畜毛嬙飛燕。」

と言ふ、牛切りの媽々をたとへもあらうに、毛嬙飛燕も凄じい、僭上の到りであるが、何も別に美婦を讃めるに遠慮は要らぬ。其處で、

不禁神骨之俱解也。である。此は些と恐しい。

「私も頓と解せねえだ、處で、當人の婦に尋ねた。」

「女房は怒つたらう、」

「何ちゆツてな。」

「だつてお前、お前の前だが、あの顔をつかめえて、牛切小町なんて、お前、怒らうぢやねえか。」

「うんね、怒らねえ。」

「はてな。」

とばかりに、

苦笑。

「怒らねえだ。が、何もはあ、自分では知らねえちゆうだ。私も、あれよ、念のために、燈をくわんと明るくして、慥う照らかいて見た。」

「氣障な奴だぜ。」

「然うすると、矢張り、あの、二目とは見られねえのよ。」

「其處が相場ぢやあるまいか。」

「燈を消すと又小町に成る、いや、其の美しい事と云つたら。」

とごくりと唾を呑み、

「へ、口で言ふやうなものではねえ。以是愛之而忘其醜。」と言ふ。

聞きものしんぜず。聞者不信。誰も此は信じまい。

「や、お婿さん。」

「無事か。」

などと、若いものが其處へぞろぞろ出て來た。で、此の話を笑ひながら傳へると、馬鹿

笑ひの高笑ひで、散々に冷かすつける。

「狐だ、狐だ。」

「此の川で垢離を取れ。」

「南無阿彌陀佛。」

と哄と囃す。

屠者向腹を立て、赫と憤つて、

「試して見ろ。」

こゝで、口あけに、最初の若いものが、其の晩の牛切の小屋へ忍ぶ。

御亭主、戸外の月あかりに、のつそりと立つて居て、

「何うだあ、」

若い衆は額を叩いて、

「偉い、」と云つて、お叩頭をして、

「違ひなし。」

「それ、何うだあ。」

と悦喜の顔色。

於、是村内の悪少、誰も彼も先づ一ツ、（馬鹿な事を）とけなしつける。

「試して見ろ。」

「トおいでなすつた、合點だ。」

亭主、月夜にのそりと立つて、

「何うだあ。」

「偉い。」と叩頭で歸る。苟も言にして信ぜられざらんか。

屠者便令與宿焉。幾

遍一邑不齊名娼矣。

とんどいちいふあまねくめいしやうもたゞならず

一夜珍しく、宵の内から亭主が寝ると、小屋の隅の暗がりに、怪しき聲で、

「馬鹿め、汝が不便さに、婦の形を變へて遣つたに、何事ぞ、其の爲體は。今去

矣。」

と膠もなく、一喝をしたかと思ふと、仙人どのと覺しき姿、窓から飛んで雲の中、

山へ上らせたまひけり。

時に其の帷中の婦を見れば、宛としておでこの醜態、明白に成畢ぬ。

屠者其の餘りの醜さに、一夜も側に我慢が成らず、田圃をすたく逃げたとかや。

明治四十四年三月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「鑑定《かんてい》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鑑定

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>